

◆「普通」の歴史意識

『普通』でいい」というその言葉をよく憶えている。「だから勉強はしたくない」というのである。

私が家庭教師のアルバイトをしていた大学院生の頃だから、もう20年近く前のことである。親としては、家庭教師をやとってなんとか勉強の習慣を身につけてもらいたい、それだけで十分だということなのだが、子のほうはそれに反発していた。勉強すればいい中学、いい将来があると信じさせようとする親に対して、自分の周りにそんなこと（中学受験）を目指している友達はいない、「普通でいい」というのである。子ども部屋で二人になって、「ではどんな仕事がしたいの？」と聞いたのだが、とにかく彼は「普通でいい」を繰り返したのだった。

顔も思い出せないあの子は成長してどうなっただろうか。勉強が嫌いかどうかということよりも、頑なに「普通」と繰り返す、その口ぶりが忘れられない。友達のこととか、具体的な何かが念頭に置かれているというよりは、ただただそれに取り憑かれているような感じだった……。

彼が思っていた（であろう）「普通」は過去のものになってしまっている。その「普通」が現在どれだけ難しいものであるか。というか、過去にそれが実在していたかどうかも怪しくなっている。

だがそもそも私たちは、何を「普通」としているだろうか。それは多数派の人のことなのか、あるいは、さまざまな属性が全体の平均に近い人をさすのだろうか。単純な平均だけでなく分布も調べれば、より詳しくそれをとらえることができるはずである。

あるいは「普通」とは、いわゆる「名もなき人々」のことだろうか。近づいてみれば、それなりに印象深い紆余曲折があり、考えさせられるが、けれども言うてよければ「どってことのない」人生を生きる人々がいる。

ただこれは失礼な話で、そもそも文字通りの意味で「名もない」人はいない。こういった場合、政治的・社会的な力や発信力の小ささを「名もない」とみているわけだが、どういう規準でそう（「名がある／名もない」と）判定しているかについては、ちょっと独り相撲のようにみえる。客観的な判断があるというよりも、むしろそう見る側の時間的・空間的なスケールの取り方のほうが大きいのではないか。

「普通」がなかなか定義しにくいのだとすれば、その定義の難しさを逆手にとって、「自分を普通だと思ふ人」を「普通」とすることにすればどうか。そういう質問をする調査もできるだろう。

もう一つ。昔観たバラエティ番組で、コーナーの名前は忘れたが「平均の人になれば勝ち」という趣旨のゲームがあった。あらかじめ用意されていたアンケート結果に基づいて、一問ごとに多数派の選択を選べなかった出演者が脱落し、最後の一人になった時点で勝ち

が決まる、というゲームである。つまりゲームでの勝者である最後の一人は、「多数派を選び続けることができた人」なのである。この「多数派を選び続ける人」が生き残り、それを唯一の個性として、逆にたった一人になってゆく姿は、何か壮絶な様子でもあった。ここで優勝者は平凡なのかそうでないのか、よく分からない。

個々の人間の選択に議論を落としたとき、多数派を選び続けることは実はそれなりに孤独なことでもある。(この逆転の効果が、その妙味だった) むしろどこか適当なところでそうあり続けることを「降りて」しまった方が楽であるし、コーナーの優勝者は、それができなかった希有な人として、「普通」であることを他の出演者に弄られていた。

さらに脇道に逸れるが(本当に毎回申し訳ない)、子ども向け人気アニメ「妖怪ウォッチ」の主人公ケータが、周りから「普通」だとみなされることに劣等感を抱く少年であることを思い出す。ある話で彼自身が妖怪にさせられたときには、「フウ2 (ツー)」という名前がつけられた。とりついた人間を「普通」にしてしまう妖怪である。

誰からも憎まれることなくそれなりに愛され、大過なく日常を過ごすことこそがそうしたアニメの主人公に求められているのだとすれば、「普通」は最重要の属性となる。だが「つまらない」と思われるのはつらいらしく、それに劣等感を抱く。

かつてのあの少年が繰り返し口にした「普通」と、いじりの対象となったり劣等感の源であったりする「普通」とが、うまく結びつかない。それが「20年」ということなのか。自分のさじ加減で「普通」を「名もなき人々」とするのも、統計的な平均と分散で「普通」を捉えようとするのも、どうもよく分からない。先程も書いた、「自分を普通だと思う人」を「普通」とするアプローチは一見絶妙な発明だと思われるが、そこには大きな未決定の空白があるようにもみえる。(それなりに特異な属性を持つ人が、それにもかかわらず自分を「普通」だと認識していれば、そのズレは社会的には何か興味深いことなのだろうけれども)

もう一つ、状況論的なことで言えば、「普通」は近年どうも旗色が悪い。「普通」ではなく「個性」が重視され、「人それぞれ」が尊重される社会である。また「多様性」や「マイノリティ」とも相性が悪い。「普通」はそれを抑圧しているものであるかのように扱われている。「普通」で良心的、リベラルであろうとする人々が、それを裏切り始めたという「リベラル疲れ」もここに関連することなのだろう。

だが「普通」というのは、私たちが自分の人生を顧みるときの手がかりである「一般化された他者」と密接に関係している。それへの参照がなければ、他人の言っていることが理解できないはずだし、他人に理解可能な形で自分を表現することもできないはずである。私たちは皆、「普通」の人がどう考えているかをシミュレートしながら生きている。「普通」の社会学が重要であるゆえんである。

こうした「普通」を、歴史や時間のなかに置き直して考えてみることはできないだろうか。現在の統計的な分布や、社会的・政治的な発言力の小ささで「普通」を考えるのではなく、堆積する時間のなかで「普通」の同一性を考えてみることはできないか。

それはあまり積極的に自らを押し出さない、文字に書かれた「歴史」とは異なった過去の記憶術である。この連載でも「歴史は特殊なことばかり」と論じたことがあった。「特殊であること」の反対に、強く意識されずに繰り返される「普通」、例えば歴史とは異なった過去の記憶術である「民俗」や「習俗」があり、その担い手としての「常民」がいる。

日常的な反復に開かれているが、時間の流れの外側からそれらを客観的に眺めてチェックすることをしないので、長い期間にわたる同一性が意識されることがない。個々のできごとの個別性は丸められ、一人一人のかけがえのなさ（その生死を含めて）は軽視される。

そうした「普通」の歴史意識には、どのようにアプローチすればよいのだろう。

ただもちろん、この緩やかな同一性は、「国民」や「日本人」と区別して考えるべきものである。むしろ、それらよりも長いスパンを持つ民俗や習俗に寄生することで「国民」や「日本人」という観念が可能になったと考えた方がよい。それらは様々な属性のベースではあるが、「普通」そのものは属性ではない。

両者を厳密に区別することは難しいけれども、「マジョリティがその存在そのもので多様性を抑圧している」という言い方は、あの少年の言葉やバラエティ番組で示された、「普通から自由になることの難しさ」によって、ちょうどその分だけはキャンセルされるのではないかと思う。